月　　刊

Mélange

Vol.143

2019.05.26

詩と評論

「月刊めらんじゅ」143 号　目次

詩・俳句

二番出口 ………………野口裕　04
花冷え　詠（俳句）　………………岩脇リーベル豊美　05
森 ………………にしもとめぐみ　06
レアリア ………………安西佐有理　07
ひめごと／さざめき ………………大橋愛由等　08
ヒルクライマー ………………高木敏克　10
王道 ………………法橋太郎　11
鳥を取る地へと向かう ………………大西隆志　12
成生岬から ………………木澤豊　13
ぞろぞろと這い回り ………………黒田ナオ　14
廃材 ………………中嶋康雄　15

連詩

T・O 氏へのオード………………大橋愛由等／原田哲郎／高谷和幸／月村香／福田知子
／黒田ナオ／中村雅子　03

連載

神戸詞（うた）あしび 132「躍動感あふれる念仏踊りは時代を超え心に響く」………………大橋愛由等　16

編集部だより★63／「平成」時代から「令和」時代に元号がかわり、あらためて権力者による時の支配が顕現化された。かといって西暦もまた公的性格は付与されているもののつきつめて考えると〈私暦〉であるのに違いない。といっても皇紀や檀紀を使うわけにはいくまい。消去法的に西暦を使っているというのが正直なところか。この列島ははたして天皇の政治軍事的・霊的実権がまんべんなく行きわたったのはいつからなのだろうか。すくなくとも奄美・沖縄といった琉球弧の住民にとって近世まで天皇家は〈異族の神〉であったはずだ（琉球王国には聞得大君を頂点とする宗教統治体制が出来上がっていて、その頂点は琉球王家の尚家である）。またアイヌ民族にとっても天皇というカムィと遭遇するキッカケもなかったのにちがいない。江戸時代（徳川時代と呼んだ方がいいという研究者もいる）の天皇は位階制度に裏付けられた権威こそ持っていたものの、政治的実権はないに等しく、その霊的権威が及ぶ範囲はせいぜい畿内あたりだったのではないか（これはあくまで私の憶測でしかすぎない）。畿内の住民としては、明治から現在まで〈天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス〉から〈象徴〉へと転移を経た天皇族が、将来その政治性が剥奪され、東京から追放されるようなことがあれば、ふたたび〈近畿の王〉として京都に戻ってきてもいいのではないかといった極論まで考えてしまう。いまは国民に支持され国民との親和性を演出している天皇族であるが、いつの時代であれ為政者という世俗勢力にとってこれほど利用しやすい機関（システム）はないだろう。（大橋愛由等記）

T・O氏へのオード

しなやかに歌いたおやかに生きて
かまびすしき世情を軽やかに超え
たぎる詩情をひとつまたひとつと
しずまらぬ抒情を日々たぎらせて
にじりよりたるヒューマンな情理
おきざりにされたる者どもへの轍
おざなりを嗤い歩み続ける詩人よ
大橋愛由等

きみは軽やかに自転車で疾走する
街はまるで君のためにあるように
振る舞い友と酒と喧騒の中に集う
バンジョーの音は一つ山を越えて
他者に開かれた現在という創造を
時代の流れに言葉のねこだ流しを
解剖台の上のミシンと蝙蝠傘との
偶然の出会いに満足してはいない
原田哲郎

みそかのワインは小さな文字類が
みえにくいとなげき塔頂のわずか
一本の空気が張りつめた音をたて
る遠くでしかも高くあるこころは

何度目かの季節をうたいおどり白
湯のようだよと芳醇にほてったぴ
りぴりと触れるものは静電気かも
高谷和幸

われらが詩友・大西隆志さん（写真左から２人目）が長年勤めた職場を卒業。その労苦をねぎらうために「カフェ・エクリ 2019.04.23」にて詩友たちの連詩と花箱を進呈しました。

それさえあればなにもいらない
それはギターやらバンジョーか
美しい形式美のうた古今東西に
和洋楽器を奏でつつ立っている
その日決して日没をむかえずに
その火決して消えることなくも
わたしたちはいつも待ってるよ
月村香

きみはもうずっとここにいたから
もういつからいたのかすっかり忘
れてしまったけれどやおら差伸べ
るきみの手はとても優しかったリ
ズムを刻むギターやラップに乗せ
るコトバは世界に散らばり続けて
もう姫路城だけでは受容できない
からひと山超えふた山越える
福田知子

突然手品師のシルクハットの中か
ら現れたかと思ったら皆さんそれ
では御機嫌ようと手を振って消え
てしまったの驚く観客に残された
のは一輪の赤い薔薇そして古いラ
ジオから聞こえてくる懐かしい歌
声とバンジョーの音だけだったわ
黒田ナオ

駆け抜けるあなたの言葉　あなたの声
目を覚ませ目を覚ませとバンジョーの響き
時は来た　春の匂いとともに
リズムに乗って踊り出せ
駆け抜ける前に　つかまえろ
中村雅子

◆二番出口

野口 裕

朝のプラットホームに
一日年取った顔が並ぶ
俺もそんな顔
さあ顔を替えよう
仮面をかぶる

出口に向かって歩き出せば
天国も地獄もこちらですと
エスカレーターが迎えてくれる

◆花冷え 詠

岩脇リーベル豊美

梅桜杏と笑い渦の花列車
転がるごと昔訪ねし古都の坂
北往けば都の乳飲み子泣き喚く
まず一日占う癖やめ牡羊座
桜抹茶日本土産とキットカット
恋猫や眠れぬ月の満ち満ちて
まほろばの春陽に薔薇石英置く
明星や天儀に明けの意味の冴え
確定申告書類重なりて弥生
熊ひとり天翻る島に渡る
河霧や朝朧ろ月空の穴
抽斗の理科教科書に仮足生ゆ
黎明のカルデラ湖鴨の一直線
夕雨占う葡萄芽吹き嫋嫋と
木蓮花鎖骨に吹き過ぐ春颯
やどがりのひとりよがりの鋏脚
オリーヴの根元にて書く俳句かな
母の日の娘スペイン語の会話

◆森

にしもとめぐみ

木々はいつのまにか
生い茂ってしまう
あなたを包むように

土はいつから繰り返し
あり続けたのか
柔らかく重なり続ける

その幹のまわり
その枝の広がり
心を休ませて
小さな花々を散りばめる

風を受けて花びらを揺らす
ハンカチノキ
高くそびえるヤマナシ
不滅の命　太陽の光
ヤドリギが緑を照らす冬枯れの日

小道を歩いて行く
こどもたちの声
どこまでも　どこまでも
僕たち一緒に進んで行かう

◆レアリア

安西佐有理

無性である彼が母（マザー）になり紅茶を淹れる
「でもわたしたちのカップはもうことばでいっぱいだから
そろそろあなたに付いてどこへとなり行きましょうイワン・スサーニン
濡れたインコの羽毛のあいだがぬるく臭ったのをあなたは覚えていますか
句読点のない敬意に満ちた幼年時代は
あなたから届いた手紙が白樺の皮に書かれていた記憶と同じぐらい
ありありとみえるから
すっかり遠いことだったのだとわたしにはわかる」
北の国の角砂糖は硬くて溶けない
彼や彼女もいまは子を産まないレアリアでしかない

◆ひめごと

大橋愛由等

春に殉死しようとした鳥たちは青に収斂する

（五月の暮れなずむ坂道でさざめ泣くことをこらえている私。足を引きずりながらとぼとぼ歩く猩々を追い抜かしざまにどこかで見知った顔だと振り返ってみると、ひらひらとした紙片を口に咥えて和讃を朗じているように見えたので、どこかの踊屋でさんざん旋回していたのだろうと想起。紫陽花のつぼみたちがちらちら私と猩々を見比べていたので「根ハ変ワラナイト思イマス」とどちらかともなく発語しているさまが展開している海風が悲しみを求めて駆け上ってくる坂。途端に聴こえてきた汽笛の音にあわせて「ぼおぼおぼお」と口真似をしてみたら紫陽花のつぼみのひとつが笑ってくれたので「情況ハ先細リデス」と言ったのは私ではなく猩々だったという笑えない事実。たしか猩々は旅をつづける身なんだと記憶の小箱をひっぱりだしどうしてこの坂の街に永く居座っているのか聴こうと思ったところに口さがない紫陽花のつほみたちがコロスのごとく「嘆キハ句読点ニ還元サレナイカラ」と言うのだが曲がり角の看板の異語が判読できずに始まってしまった私の立ちすくみ。あと少しでカーサ・ヌエバに到着しようとしたとき、猩々がついてくるので〈非理法権天〉とつぶやくと目をうるませてこくりと頭をたれて引き返していく様子を眺めながら、寒くないのにズボンのポケットに両手をつっこむ私という仮象。〈つぼみ〉という準備態であることについて議論していた紫陽花のつぼみたちはかつて北に去っていく鳥に喰べられた仲間のつぼみのことが思い出され、いまごろどこにいてなにを歌っているのか語り合っているところを私がそれとなく聴いてしまったこともまたこの坂での温帯的な五月の出来事。

◆さざめき

大橋愛由等

悲哭は蒸留してはいけないと群雲は云った

（いくつもの大河を超えて歩行してきた鉱夫に見えてきたものはオリーブ畠にかこまれたなんの変哲もない村なのだがこのあたりまでやってくるといつも「一日が二七時間あったのなら*」と軽く低く唸るように歌い出し、華奢な身体に優美な刺繍を施したマントンをまとったマリアの吐息が聞こえてきそうで、きっとマリアはシチリアに兵士として出征したホセに向けて今年のオリーブとサフランの収穫について長い手紙を書いているのだけれど、鉱夫が握りしめているのはマリアがホセに入営する日に託したロザリオであるのはマリアに会うまで言わないでおこうと決めていたが、マリアの家にたどり着いた時、マリアは鉱夫の乾いた汗を見て泣き出し、それをなぐさめる神父ハビエルは「渡り鳥たちの涙が雨になる日に知らせがあるとその日に限って井戸が枯れてしまう」とマリアの肩を抱き鉱夫は「シチリアの赤い花が咲き乱れる平原であえかな風になぶられながらすすり泣いていた少女と弟は輪唱していた」とうつむいて語りだすのだがマリアは「あなたがわたしの恋人だったあの白い春　あなたの馬の蹄は四つの銀のすすり泣き*」と歌うばかりで神父ハビエルの「月の満ち欠けは風の通り道を替えるのだがその変わりざまを知っいるのは奇数月うまれの黒猫だけ」とのなぐさめや鉱夫の「夜にだけ歌い出すナランハの葉を月にかざすと次の朝にはバルコーンにうずらがやってくるのだよ」との言葉にもマリアは反応せず長い黒髪を振り乱すばかりなので鉱夫と神父ハビエルは同時にこういうのだった。「きっと亡くした助詞は二番鶏が聞こえない朝にテエブルの上で小躍りしているよ」。

＊=フェデリコ・ガルシア・ロルカ「ソロンゴ・ヒターノ」

◆ヒルクライマー

高木敏克

記憶の源流を求めて川沿いの山道を登ると影の気配が追ってくる
魚影は川面の光に隠れているが私を抜き去ろうとしているみたいだ
初めての記憶とはおそらく影だったからいつまでも闇が恐ろしい
影の裏には永遠の雲が隠れていて生まれた私を引き戻そうとしているから
産声に驚いてついうっかり泣いて悲しみの甘い味を覚えてしまったのだ
どこまでも曲面の道筋でまだ踊っている木漏れ日は絵画の原型なのか
地表の曲面影絵を見るためにわたしの自転車は悲しい玩具になったのか
闇に沈みこめない死者たちが背後から銀鱗を輝かせて追いかけてくるのに
そう思う今こそヒルクライマーのわたしは山の重さを足に感じるのだった
山はその重さでこそ存在するのだから体重は預けてわたしは高さをもらう
たしかに昼なお暗い再度山の中では谷底の闇がこの体重を狙っている
うかつに山の闇を透視すると反対側のドライブウェイまで見えてしまうし
闇の底には地底の海も見えてくるから闇の重さでわたしは浮き上がるのか
記憶が闇底に沈んでいくとしたら闇がわたしの体重を狙っているからか
確かに言葉で浮かび上がろうとすると思考が止まり舌も回らなくなってくる
雲を踏む快さがわたしを眠くしてもタイヤで山蜘蛛を踏んではならない
だから考えるのはよそうヒルクライムに溺れて脳まで筋肉になっているし
言葉の限界を思い知らされたクライマーのわたしはいま雲に浮輪を得た気分だ
地底からひたすら浮かび上がることを願う卑しい私の姿が空に映っているから
山頂には大きな鏡が輝いてわたしたちの到着を待っているはずだからしかし
神社の鳥居には蜘蛛の巣がはっていて通り過ぎるものがしばらくいないみたいだ
ヒルクライマーがここはゴールですかと答を探しているのに雲が沸いてきた
はたして私は一番ですかこの鳥居は出口ですか門番は突然現れるのですか？
しかし空と闇しか見えない大雲大社の鳥居は沈黙のためにだけそこにある
山頂についたヒルクライマーたちは空から降りた鳥になって爪先で歩いていて
ちょんちょん鳥居の下の石段を行ったり来たりうろうろするだけで話せない
ただ山の中を透視していると闇の向こうの谷から登ってくる仲間が見えるし
山の重量を正確に測りながら鳥居の上から鳥になって自分の位置も知っている
最近の自転車にはそういう最新装置が装着されていても不思議ではないのだが
鳥居の上では蝙蝠が釣れたとヒルクライマーが大きな釣竿をふりまわしている

◆王道

法橋太郎

生きてこそ勝者敗者のあるものを
死して後には跡形もなし

のちに陳と名乗るこの男は父の命令により三度西域の前線に送られて帰還した。この部族の王である父もこの息子を受け入れざるをえなくなり陳に一部隊と妻を与えた。

陳はその部隊を率いてかつての仲間たちに弓を引かせた。そのあとみずから妻を射殺しその一族を殺させた。そして父である王を殺させてこの部族の王となった。陳は南の王朝と手を結びその王朝の内乱鎮圧にちからを貸したが金品のみしか与えられなかったのを不服として王朝の混乱に乗じてその王朝の首都を制圧した。

この広大な王朝を手に入れるために陳は手段を選ばなかった。陳は王の代理として君臨し各地の内乱を平定していった。傀儡の王を利用して内乱の指導者たちに勲位を濫発して内乱軍を親子、兄弟、師弟等、仲違いさせて混乱させたのだ。

内乱を鎮圧したあと陳は前王朝の王を殺してはじめてみずからを王とした。わざと民衆の見える王城の高台で前王の首を刎ねさせ、その髪を陳自身が握って首を掲げてみせたのだ。前王朝よりさらに大きな国土を治めるにあたっても手を抜かなかった。腹心の部下を大臣につかせた。

しかしみずからが年老いたことに陳は気づいた。やがては自分も死ななければならないことを悟ったのだった。陳はあらゆる識者に問いを発しついに仏教を手厚く保護した。息子に王位を継承したあと髪を剃り仏教に帰依して一生を終えた。

◆鳥を取る地へと向かう

大西隆志

国道に付けられた
呼称らしい数字に
バスも車も停まず
西へ東へと連なる
トンネルと湖面は
国の境を匿すのか
左右に揺れる身体
緑の森に反応する
雪を被った裸の枝
視神系にも繋がる
車内は別の次元か

瀬戸内から日本海
オオクニヌシの逆
川にそって諍いは
東の勢力がおさえ
小さき神々は隠棲
後の世に石の棺に
形を変えて顕われ
掘り出された時間
野の傍らに咲いた
乙女らが摘んだ花
語り掛けの形象か

ブルーズを聞いて
朽ちていく記憶を
あらたに捏造して
丘の上からの眺め
血が流れた土地に
誰かの平定の狼煙
地上の営みの悪意
地下に向かう恋人
曲がりくねる国道
棚引く雲は見えて
幻の羽音はまだ先

◆成生岬から

木澤豊

断崖の道の山側に
大きな蕗が群生していた
崖の向こう　くらい海で
鉄の船が燃えて
火の海へ
黒い人影がいくつも飛ぶのを見た
いつまでも　だ
いくつも　だ

岬の突端の寺に
海が静まっている

金閣寺に火を放った
養賢さんがいたはずだ

山に入ったわたしは
艦載機はいくども低空飛行していた
飛行士の青年の顔が笑っていた
翌日　終戦を知った

それから町へ出て
あの青年とおなじくらてになって
よう

私の住む寮の電車道の
交差点の夜空に　火玉が飛んだ
赤かったぞ
誰かのタマシイだと
わかったぞ

◆ぞろぞろと這い回り

黒田ナオ

団地のすぐ横にある水路で
今日もウシガエルが鳴いている
ごえごえごー、ごみだらげー
潰れたペットボトルにアイスカップ
穴の空いたバケツやら片方だけのスリッパが浮かぶ水路の
ホテアオイが生い茂る
その下で生きているのは、メダカ、鯉、鮒
誰が放したのかミドリガメ
クサガメだっている
オオカナダ藻はゆれて蠢き
それからそれから
地下水路を通ってこっそりやって来られた
雷魚様

ごみの水路に捨てました
三十五点の答案用紙と
給食で残したコッペパン

ほやほやほや
団地は昔、田んぼでしたからね

ぞろぞろと這い回る感情も
水草にひっかかって産卵し、子魚が生まれ
生き残り、異形の夢と泳いでいる
見たこともない大男
一つ目小僧に蛇女、河童様

漂って

呼んでいる

夜中の二時に迎えに来る
団地の窓を叩くもの

アイスの蓋にこびりついていたはずだ

雷魚様は
なにもかもお見通しですよ

窓の外では、オオカナダ藻が怪しくゆらぎ
ブラックバスの歌声に
アメリカザリガニも踊り出して

いま、濁った水路の底で
ぼうっと光る
朱い鳥居を
何かがするっと抜けました

◆廃材

中嶋康雄

諦めのお宮さんの横手に
だだっ広い原っぱがあった
原っぱでバッタが巨大になっていた
草を食べるだけでは維持できず
巨大な腹を激しくこすり合わせた
腹の縦の節が発火して
捨て置かれた廃材を食べていた
廃材はバッタの腸を経巡った
糞塚に集積し
廃材が挨拶していた
よろこびすら懐かしかった
日曜大工で廃材を使った
簡単な手摺りを作った
手摺りを伝うおばあちゃんが廃材になった
孫の頭を撫でるその手も廃材だった
孫も廃材になった
孫は学校で倉庫に忍び込み
古い跳び箱を盗んで食べた
いつもうつろな目に
ペンキの臭いがする目脂がたまり
薄ら寒い羽虫が飛来した
大量の卵を産み付けた
父は家で晩酌をした
廃材は父の焼酎にも紛れ込んだ
父は通勤電車内で
廃材みたいなカサカサの肌を持つ女に
溶けてそのまま帰らなかった
父の代わりに巨大なバッタが帰ってきた
母は父が人だろうがバッタだろうが
もうどうでもよかった
廃材が母の腹を満たしていた
触覚器がものすごく長い複眼が
母の臍から出てきた
あられもない外の様子を窺った
複眼は母の乳房に吸い付いた
縦の細かい節がある乳白色の体を
うねうねさせた
捨てられた足がたくさん蠢いた
廃材の家族を食べた
廃材じゃない家族も食べた
食べ尽くすと蛹になった
蛹は長い間じっとしていた
雨が降った後の蒸し暑い夜だった
蛹が割れた
中から出てきた廃材が
真っ暗な口を開けて
空っぽの家で迷っていた

神戸詞(うた)あしび

132-2019.05.26 大橋愛由等

躍動感あふれる念仏踊は時代を超え響く

この躍動感はいったいどう表現していいのだろう。

一二九九年に書き上げられた「国宝・一遍聖絵」を国立京都博物館に見に行った(「国宝 一遍聖絵と時宗の名宝展」)。13世紀といえばヨーロッパではようやくルネッサンス絵画が勃興しはじめた時期である。そのような時代に極東の日本では、一遍(1239~89)の踊り念仏が躍動感あふれる筆致で描かれている。僧たちは裸足で踊屋に足を踏み鳴らしながら踊っている(時にその床板は踏み抜かれることもあったという)。踊るひとたちの顔は恍惚と描かれており、宗教的な法悦(エクスタシー)が観る者にも伝わってくる。画僧である円伊の描写力の巧みさが評価されよう。板敷きを激しく打ち鳴らす音や念仏などによって、踊りを見届ける者たちを熱狂させたそのありさままでも絵巻物から読み取ることができる。

自然発生的に踊り始めた念仏踊りも、一遍とまったく同時代人だった一向俊聖(1239~89)の念仏踊りなどと相互に影響しあっていたのだろうか。時代が下っていくと念仏踊りも形式化していったことだろう。(ちなみに現在に伝わる時宗の念仏踊の動画を見ていると躍動感あふれる側面や〝ぞめき感〟は削ぎ落とされ、定式化した踊りになっている)。一遍が踊った当時の念仏踊りのダイナミズムを感じるためには、現在の阿波おどりやよさこい踊りのような躍動感あふれる踊りを想起した方がいいのかもしれない。

国宝「一遍聖絵」から
(中央の日に焼けた僧が一遍)

一遍の念仏踊りは、絵巻としてビジュアルに記録されているので、視覚的には了解しえるが、踊りの振りや、鉦太鼓の音はどのようなものなのだったのだろうか。あるいは、僧たちが踊りながら唱えただろう念仏の調子や和讃はどようなものであったのかは、想像するしかないのだが。

一遍という仏教者は、遊行を始める前まで徹底して浄土教の教えをたたきこんだと思われる(一遍が学んだのは大宰府にいた聖達で浄土宗西山義を学んだ。その聖達は法然の一番弟子の証空の弟子にあたる)。一遍は浄土教を学んだあとも学僧のように寺院にこもることなく、遊行=捨聖という人々の中に入り込み、いわば「人民の中に=ナロードニキ」を実践している。命が果てるまで念仏業を拡めたそのすごみに、私は若い時から惹かれていた。この一遍のすごみは、寺院というものも捨て、道場という名の、遊撃施設を拠点にしたことにも注目したい。それが後の日本における教会という権威の場所を拒絶した「無教会主義」に地下水脈のようにつながっているのかもしれないと想うとぞくぞくしてしまう。つまり寺院(権威)に依拠することなく、制度(教団)や施設(寺院)を拒絶して、南無阿弥陀仏という名号(エクリチュール)に一体化しようとしたわけだから、形あるものは必要なかったわけだ。

それは一遍が亡くなる寸前に言い放った「一代の聖教みなつきて、南無阿弥陀仏となりはてぬ」によく表れている。一遍もまた仏陀やイエスのように自らは教団を作ることは考えなかったと思われる(時宗という教団が成立したのは、一遍のあとを継いだ真教が優れたオルガナイザーであったという事情もある)。

すべてを捨てて、南無阿弥陀仏というエクリチュールに一体化することを目指した一遍。その歩き果てた一途さは、時代を超えて私の心と存在をいまでも鷲掴みするのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.143
神戸

2019年05月26日　通巻143号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)